

なぜ、歴史・文化を学ぶのか

松 尾 千 歳

1. はじめに

私は鹿児島大学と鹿児島国際大学で非常勤講師として鹿児島の歴史・文化に関する講義を担当させていただいている。また鹿児島純心女子短期大学・鹿児島女子短期大学でも年に数回、鹿児島の歴史・文化のお話をさせていただいていた。こちらは、現在、部下の学芸員に引き継いでもらっている。

さて、私は鹿児島の歴史・文化について話す際、なぜ歴史と文化を学ぶのか、まず自分なりの考えを伝えている。これは、あくまでも私個人の考えだが、私は人と人、地域と地域の交流は、その人・地域の歴史・文化の衝突でもあると思っている。自分たちの歴史・文化をきちんと理解し、誇りを持っていなければ、相手の歴史・文化に飲み込まれ、流されてしまう。理解し、誇りを持っていれば、相手に流されることなく、相手の良い所を吸収し自分の成長に繋げることもできると考えている。また細かな年号や人名にこだわる必要はない。歴史の流れを理解することが重要だとも語りかけている。歴史で人名・年号だけを覚えるのは、テレビドラマなどで、ストーリーを無視して、誰が第何回目のどこの場面に登場するか覚えているようなもので、ドラマでストーリーが大切なように、歴史学も歴史の流れ、ストーリーこそしっかり理解すべきものなのだと伝えている。

また、私の目には、今の鹿児島は自分たちの歴史・文化を見失い、さまよっているように映る。だからかよく、「何もない鹿児島」という声を聞く。何もないのではなく知らないだけである。

むしろ、江戸時代の方が自分たちの歴史・文化をきちんと理解し、それに誇りを持っていたのではないかと思う。例えば西郷隆盛や大久保利

通ら、彼らは薩摩の歴史・文化に誇りを持っていた。若いころから江戸や京都などに出て、京都の公家や幕臣・他藩士たち、さらには外国人たちとも交わっていたが、西郷らは一貫して薩摩藩士だと胸を張り、相手の歴史・文化に飲み込まれたり流されたりすることなく、相手の良い所を吸収して自分の成長に繋げている。

今の鹿児島の若者たちにも、この点は見習ってもらいたいと思っている。

2. 今に繋がる歴史・文化

歴史を学んで、過去のことを知って何になるのか。せいぜい過去の過ちを繰り返さないための参考になるだけだという声もよく聞く。過去は過去、今は今と、歴史が自分たちとあまり関係ない別次元のものと誤解されがちなのである。

だが、我々は歴史の流れの中に身を置いている。過去と今、そして未来は連続していることを忘れてはならない。好む好まざるに係わらず、我々は、歴史のバトンを受け継ぎ、次の世代に引き継ぐ役割を担っているのである。だから、自分が受け継いだ歴史・文化がどのようなものか知っているか、知らないか、また誇りを持っているか、持っていないかで、自分の立ち位置も代わってくるし、次世代に引き継げることも変わってしまう。歴史・文化を知ることとは、将来にもかかわる重要なことなのである。

歴史・文化が、過去と今、そして未来に繋がっていること、そしてそれをしっかり意識しているかいらないかで、大きな差が出る事例として街づくりとの関係をみてみたい。

いま活気のある街は、歴史をうまく受け継ぎ、それを活かしている所が多いのである。その事例として横浜と小樽を紹介する。

まず横浜。横浜は、首都圏で独特の雰囲気を持続し個性を発揮し続け、その街づくりは高く評価されている。この街づくりに初めからかわり、横浜市都市デザイン室長などを歴任されたのが国吉直行氏である。私は、以前、国吉氏から街づくりについて話を伺う機会があった。

国吉氏によれば、横浜市が町づくりに力をいれるようになったのは、いまから50年ほど前の高度成長期のことだという。この時代、各地で開

なぜ、歴史・文化を学ぶのか

発が進み、古いものが次々と壊され、新しい建物・施設があまり景観などを意識されないまま乱立するようになった。首都圏では、東京の文化圏が急速に拡大し、まわりの市町村はそれに飲み込まれて個性を失い、存在感が薄くなってしまった。横浜もそうなりかけたのである。こうした状況下、横浜市で都市計画を担当している人たちが、港町横浜の歴史・文化は、東京がいくらお金をかけても造ることはできない。それを活かした街づくりをすれば、東京の文化圏に飲み込まれることはないと活動し始めたのだという。

港町横浜の歴史・文化を物語るものを、単に保存するだけでなく活用を図る。また個々に残すのではなく、歴史資産・文化財を線で結び、新たな発見・楽しみが見いだせるようにする。歩いて楽しめる街づくりようにされたとのことである。こうして横浜中華街、みなとみらい地区などが整備されたのである。

どのような工夫がなされているか、桜木町駅前と赤レンガ倉庫のある新港地区とを結ぶ汽車道を見てみよう。

汽車道は、明治から平成元年（1989）まで使われていた臨港線の廃線を、JR 桜木町駅やランドマークタワー・ドックヤードガーデンなどと赤レンガ倉庫とを結ぶ遊歩道として再利用したものである。明治42年（1909）



に架設されたアメリカ製の港一号橋梁・港二号橋梁、昭和3年（1928）に

汽車道：正面の建物がナビオス横浜。開口部の先に赤レンガ倉庫が見えている。

北海道夕張から移設された港三号橋梁などが活用されている。さらにレールも残され、廃線跡にホテル「ナビオス横浜」が建てられることになった時には、ホテルに協力を求めて開口部を造り、そこから赤レンガまたはランドマークタワーなどが望めるようにされた。

国吉氏は鶴丸高校卒で、鹿児島に強い愛着を抱かれていた。国吉氏の

「横浜は幕末にできた町。江戸時代以前のもではなく、明治・大正・昭和のものを街づくりに活用している」「鹿児島は室町や江戸時代のもがたくさん残り、持っている時代背景・ストーリーも日本から世界にはみ出したような雄大なもの。だがこれらは全然活用されていない」「鹿児島の人たちが自分たちの歴史・文化のすばらしさに気づき、それを活用した街づくりをすれば、日本のどこにでも負けないような活気あふれる所になる」という言葉が耳底にとどまっている。

次に北海道の小樽。よく知られているように北海道の開拓には黒田清隆・永山武四郎ら大勢の鹿児島出身者が関わっている。大勢の鹿児島出身者が関わったのは、明治政府が薩長主導で、開拓もその延長線上にあるからと言われることが多いが、そうではない。

1840年代、薩摩藩は日本の他地域より早く、東南アジア・中国から北上してきたイギリス・フランスの激しい外圧にさらされた。そしてこのままでは植民地化されると強い危機感を抱き、近代化・工業化に取り組み、嘉永4年（1851）、薩摩藩主に就任した島津斉彬はこの動きを加速させた。

斉彬は北から日本に迫るロシアに対する備えがなされていないことを危惧した。兵隊を送っても北海道は守れない。開拓して大勢の日本人が豊かに暮らすようにすればロシアも手出しができなくなると、開拓の必要性を説いた。

これを受けて、維新後、黒田ら大勢の鹿児島出身者が北海道に乗り込み、鹿児島の人脈、知識・経験を活用して開拓に従事したのである。例えば、「少年よ大志を抱け」という言葉で知られる札幌農学校（現北海道大学）の初代教頭クラーク、彼の招聘には薩摩藩英国留学生でのちに駐米公使となっていた森有礼、第二次薩摩藩留学生として米国に留学し、クラークに学び、帰国後、開拓使に勤務していた湯地定基が関わっている。また札幌農学校の校長、クラークの上司は鹿児島出身の調所広丈（薩摩藩家老調所広郷の子）であった。また、屯田兵制度は、薩摩藩の郷土制度が元になっている。

こうした鹿児島と北海道のつながりを調査・研究・顕彰するため、私はコロナ流行前、年2回ほど北海道に行って、北海道の研究者たちと情報交換をしていた。その際に気になったのが石蔵である。

鹿児島でよく見かける溶結凝灰岩で造られた石蔵、同じ九州でも福岡など九州北部にはない。日本の他地域の大半も同様である。関東に軽石凝灰岩の大谷石を用いた石蔵があるが、鹿児島の石蔵とは異質である。ところが北海道では鹿児島にあってもおかしくないと思えるような石蔵があらこちらにある。石蔵を造る職人が鹿児島から行っているのではないかと考えているが、残念ながらまだそれを裏付ける史料は見いだせていない。

また、特に鹿児島に似ていると感じたのは小樽の石倉群である。小樽

は北海道開拓の交通拠点、特に空知地区から札幌経由で運び出される石炭の積出港として栄えた。炭鉱開発および空知と小樽を結ぶ鉄道は、当初は開拓使直属であったが、明治22年（1889）に北海道炭鉱鉄道会社に払い下げられた。社長は鹿児島出身で開拓使の官僚であった堀基である。このようなことから、小樽開発、特に初期段階は鹿児島出身者がかなり関わっていたのではないかと考えている。だから鹿児島と似たような石蔵があるのではないかと考えたのである。

かつて似たような溶結凝灰岩製の波止があり石蔵が建ち並んでいた鹿児島本港区と小樽運河地区、それが現在ではまったく違った状況になっている。鹿児島本港区では石蔵や同じ溶結凝灰岩製の波止の大半が取り



小樽石蔵群古写真：小樽市教育委員会編『小樽 歴史的建造物と町並み』（1982年）より



鹿児島本港区石蔵群：昭和60年頃（松尾撮影）。

壊された。わずかに残されている程度である。一方、小樽運河は波止や石蔵を核に、その他歴史的建造物がうまく活用され、多くの観光客が訪れている。ではなぜそのような差が生まれたのか、私は石蔵等の背景の背景にある歴史・文化、その大切さすごさをどれだけ理解していたかの差ではないかと思っている。

小樽運河なども偶然残されたわけでもないし、昔から注目されていたわけでもない。取り壊されそうになったこともある。

第二次世界大戦が終わると、次第に小樽港に近代的な埠頭が整備され、小樽運河は使命を終えた。昭和41年（1966）には、臨港線（現北海道道17号など）の6車線化、運河の埋め立て、周囲の石蔵など歴史的建造物群の解体・撤去を伴う都市決定計画が作成された。これに対し、小樽運河一帯は、交通の要衝として小樽が栄えた歴史・文化を象徴する場所であると、運河や石蔵群などの保存・活用を求める市民運動が起こった。10年以上に及ぶ議論が続き、その結果、昭和58年に小樽市は北海道初の景観条例「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」を制定、昭和41年の都市決定計画は見直され、運河の幅半分を埋め立てて道路とするものの、運河さらに周辺の歴史的建造物群を保存・活用した街づくりがおこなわれたのである。そして、小樽の人たちは運河を街のシンボルとみとめ、その存在を誇りにしている。さらに北海道を代表する観光地となり、大勢の人が訪れている。



小樽運河：溶結凝灰岩で造られた波止・石蔵が建ち並ぶ。

では鹿児島本鉱区の場合はどうかというと、石蔵の保存・活用を求める意見はあったが、残念ながら全市的な活動には繋がらなかった。横浜や小樽などに負けずとも劣らない歴史・文化があるにもかかわらずである。マスコミなどでもあまり取り上げられることもないまま、埋め立てが進み、多くの石蔵が解体・撤去された。鹿児島の人たちが本港区の

文化財が物語る歴史・文化のすごさ、すばらしさを知らない、認識していなかったからだとは私は思っている。

これは私の体験だが、文化庁が鹿児島県でおこなった近代化遺産の調査に委員の一人としてかわった。その際、かごしま水族館横の新波止砲台



新波止砲台跡（重要文化財）

跡を国の文化財にしてはどうかと提案した。江戸時代、江戸や大坂（大阪）などでもこのような波止はなかった。千石船のような大型船は沖に停泊し、小型船に人・物資を積みかえて陸地と行き来していた。ところが鹿児島はこのような波止があり、千石船程度の大型船なら接岸し、人・物資の積み降ろしも直接できた。港湾都市として栄えた鹿児島の歴史、技術の高さを示すもので、文化庁や県の文化財担当者も指定に同意してくれたので、すんなり指定に進むものと思っていた。ところが波止を管理する人たちは、「こんな古いものどこにでもある。保存してもしかたない。取り壊して近代的なものに造りなおす計画がある」と反対した。港湾の管理者に、その価値がなかなか理解してもらえず、指定にかなりの時間が費やされた。昭和40年代・50年代に文化庁が甲突川に架かる石橋を重要文化財にしたいと鹿児島県・市に伝えた際、県・市の担当者は新たな道路計画で橋を造りなおす計画があるからとこれを受け入れなかったという話を聞いたことがあった。こういう話は過去のものと思っていたが、自分も体験することになったのである。

横浜や小樽もそうだが、古いから残せとか、古いものすべてを残せと言っているわけではない。また観光振興だけの問題でもない。その地域のアイデンティティにかかわるようなものを選び、それらを大切に保存・活用し、活気ある住みたくなる街、住んで良かったと思えるような街づくりをすべきだと思っているのである。そして、残すべきもの、活用すべきものの選択には、自分たちの歴史・文化をきちんと理解してお

くことが欠かせないというのが私の考えである。

3. 誤解されがちな鹿児島の歴史・文化

私は昭和54年（1979）に鹿児島大学に入学し、卒業後、尚古集成館に入館した。そして40年ほど鹿児島の歴史・文化を調査・研究しているが、調査・研究をすればするほど、自分が鹿児島の歴史・文化を誤解していた、また多くの人が誤解しているという思いが強くなる。特に鹿児島の人たちが自分たちの歴史・文化を誤解していると感じる。

私が当初抱いていた鹿児島の歴史・文化のイメージは、鹿児島は日本の隅っこにある辺境の地。新たな歴史の流れ、文化・技術などは京都や江戸（東京）で生み出され、遠く離れた鹿児島は最後に伝わってくるような後進地帯。文化や技術水準は低く、閉鎖的で貧しい所だったというものであった。鹿児島の方と、歴史・文化について意見を交わすことがあるが、今も上記のようなイメージを抱いている方が多い。だが、実際は外国と接する場所で、海外の情報・文化・物資が真っ先に伝わってくる先進的な所で、文化水準も技術水準も極めて高く、開放的で豊かな所であった。

今なお誤ったイメージが広がっているのは、過去の歴史研究状況がまだ払拭されず、新たな研究成果がまだ十分反映されていないからである。

そもそも、昭和40年代頃まで、鹿児島の歴史研究、特に近世史研究は、西郷隆盛や大久保利通らに関する研究が主であった。西郷・大久保に関する分野の研究は進んでいたが、それ以外の部分はさほど関心が払われず立ち遅れていた。また、活字化された史料は極めて少なく、伝承・聞書きによる調査・研究も多かった。このような状況であったため、誤解されたような、一部しか見ていない鹿児島の歴史・文化のイメージが広がっていたのである。

昭和40年頃、高度成長期に生活が豊かになると、歴史・文化に対する関心も高まり、史料集や郷土誌なども刊行されるようになって状況が改善され始めた。ただ鹿児島が輝いて見えた幕末期、西郷・大久保らに関心が集中するという状況は続いた。

これではダメだと、鹿児島大学の五味克夫教授や原口虎雄教授らが強

く訴え、各方面に働きかけられて、次第に研究分野の幅が広がっていった。例えば、我々がよく利用する『鹿児島県史料』（当初は鹿児島県維新史料編さん所、現在は県歴史・美術センター黎明館が編さん担当）、これも当初は「旧記雑録追録」や「忠義公史料」「西南戦争」など幕末維新期に関する史料の刊行だけしか計画されていなかった。これを五味教授らが基本史料である「旧記雑録前編」「旧記雑録後編」など中世・近世前中期の史料も無視してはいけないと主張し、それが認められ、中世から近世・近代にいたる幅広い史料が刊行されることになった。刊行は現在も続き、令和3年度には104冊もの史料集が利用できるようになっている。これほどの史料群を刊行した都道府県は他にない。

さらに『鹿児島県史料』だけでなく様々な史料が活字化されて利用できるようになった。近年はネットでの公開も行われるようになり、研究対象も広がり、それとともに鹿児島の歴史・文化の調査・研究も進んだ。

私が尚古集成館に入った昭和58年頃は、まさに歴史研究の流れが大きく変わり、その成果が表れ始めた時であった。新たな史料の発見によって伝承が否定されることや、漠然と伝わっていたものの真意が判明する、誤解されていたことが明らかになったというようなことが多々あった。こうした変化を自分の体験を交えて振り返ってみたい。

まず入館した頃は、まだ西郷・大久保研究にしか興味がないという人が残っていた。文化史・技術史などに興味を持っていた私は、研究会などの後の懇親会で、よくそうした先輩の研究者から「なぜ君は西郷先生の研究をしないのか」などと叱られたものである。

また『鹿児島県史料』などの刊行によって、従来の定説がいくつも覆されるのを目の当たりにした。例えば安政3年（1856）に島津斉彬の養女篤姫（天璋院）が13代將軍徳川家定のもとに嫁いでいる。従来、この縁組は、一橋慶喜を次期將軍にするための大奥工作だといわれていた。斉彬が同じ一橋派の老中阿部正弘、福井藩主松平春嶽らと連絡をとりあい、篤姫を強引に嫁がせ、大奥工作をおこなわせたのだというのである。ところが『鹿児島県史料』『斉彬公史料』に収録された関係史料によって、縁談は徳川家から持ち込まれたものであることが明らかになった。長命で子宝に恵まれた11代將軍家斉が、25代島津重豪の娘・茂姫（広大院）を御台所（夫人）に迎えており、病弱で子宝に恵まれない家定と彼

をとりまく大奥の人たちが、家斉と茂姫の前例にあやかれば、家定が元氣になり子宝に恵まれるのではと考え、島津家に縁談を持ち込んだものだった。また、篤姫入輿後、慶喜擁立のため篤姫を利用すべきと主張した松平春嶽に対し、斉彬が夫婦仲を壊すようなことはすべきではないとこれを諫めた書状も収録されていた。伝承と史実はまったく異なっていたのである。

さらに史料集として活字化されたことにより、県内だけでなく県外・国外の研究者が史料に触れることが可能となった。薩摩藩・島津家を研究対象とする人も増え、様々な視点で研究が進み、鹿児島県の歴史・文化の特色なども明らかにされていった。

こうした研究成果は、研究者レベルでは共有されるようになってきている。また「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録に活用され、NHK 大河ドラマ「天璋院篤姫」「西郷どん」などのストーリーにも反映されたが、まだ一般には広まっていないというのが現状である。

4. 特殊な鹿児島県の歴史・文化

鹿児島県の歴史・文化に関する調査が進んでいるにも関わらず、それが一般に広まらないのは、鹿児島県の歴史・文化が日本の他地域とかなり異なっていることが一因ではないかと思っている。鹿児島県は、鎌倉時代から続く古い歴史・文化が色濃く残されている一方で、海外の影響を真っ先に受け、その文化・技術も育まれるという、真逆の二面性を持つ歴史・文化が育まれていたのである。このため理解されにくく、誤解されやすいのではないかと思っている。

まず古い歴史・文化。鹿児島県は鎌倉時代から明治4年（1871）の廃藩置県まで島津氏が統治し続けてきた。700年間も同じ一族が統治してきたというのは非常に珍しい。

日本の大部分の地域は、鎌倉時代と室町時代、江戸時代は統治者が違うのである。例えば私の郷里・筑前国（現福岡県）では鎌倉時代は少弐氏、室町時代は大内・大友氏、江戸時代は黒田氏と支配者が変わっている。長州藩の毛利氏や、仙台の伊達氏、秋田の佐竹氏など鎌倉時代からの歴史を持つ大名はいたが、毛利家は戦国期まで安芸国（現広島県）の一豪族に過ぎず、伊達氏もかつては会津（現福島県）、佐竹氏は常陸国

(現茨城県)が所領であった。いずれも16世紀末または17世紀初頭に転封させられており、鎌倉時代からの歴史を持つ家が藩主であっても、その領国が鎌倉時代から連綿と歴史・文化を受け継ぎ、育んできたわけではないのである。

日本の他地域では、支配者が変わるごとに、その地域の歴史・文化がリセットされるような状態となっている。だが、鹿児島は違う。だから、県内各地に武家屋敷群が残されているなど、中世的な雰囲気が色濃く漂っている。

また、鹿児島は日本の端にある。一般に文化や技術は京都や江戸・大坂など日本の中央部で生み出され、それが地方に広まっていく。中央部から遠く離れた鹿児島は最後に伝わるような後進地、レベルも低い所とイメージされがちである。これが古い歴史・文化が受け継がれてきたことと相まって、鹿児島は保守的な所、古く遅れた文化・技術を頑なに守っている所というようなイメージが形成されたのであろう。

だが、日本の端にあるということは外国に近いということでもある。視野を世界に広げれば、京都や江戸・大坂の方が辺境となる。鹿児島は海外の情報・文化・技術などが真っ先に伝わってくるような所で、そのレベルも高いのである。鉄砲やキリスト教がまず鹿児島に伝わり、それが日本各地に広まったことはよく知られているが、それは例外的なものと思なされがちである。だが、鉄砲やキリスト教だけでなく、武士道の精神的支柱となった朱子学、サツマイモのような海外の作物など、まず鹿児島に伝わって日本各地に広まったものがたくさんある。

さらに、日本の大部分の地域は、その地域の歴史・文化は国内だけのストーリーで完結するものが多いが、鹿児島の歴史・文化は国内で完結しない。日本から一歩世界にはみ出したようなストーリーである。鹿児島のことを、日本の他地域同様に、国内だけの動きを追っていると、誤解された陳腐なものになりがちなのである。

例えば明治維新。薩摩藩・島津氏は関ヶ原合戦で負けた。江戸時代を通じてその恨みを抱き続け、虎視眈々と幕府転覆、徳川にとって代わる機会をうかがい続けてきた。幕末、激しい外圧にさらされ幕府が弱体ぶりを示すと、好機到来とばかりに倒幕に踏み切り、徳川にとって代わったというようなストーリーで語られることが多い。しかし、薩摩藩・島

津氏は幕府・徳川に恨みなど抱き続けていない。良好な関係を維持していた。薩摩藩が明治維新を断行したのは、1840年代、日本の他地域より早く、イギリスやフランスなどの激しい外圧にさらされ、体制の変革が必要だと悟ったからである。

相手はイギリスやフランス、狭い日本で幕府だの藩だの言っている場合ではないと、薩摩藩は、幕府や藩という枠を超えた挙国一致体制の構築を目指した。はじめ幕府を中核にその実現を目指したが、幕府との考えの相違がしだいに明らかになり、天皇を中心とした挙国一致体制の構築を目指し、これを実現させたのである。だから幕府が無くなると薩摩藩も消滅した。将軍がいなくなると薩摩藩主もいなくなった。薩摩藩士など新政府側の武士たちも、負けた旧徳川方の武士たちも士族の特権を失った。薩摩藩出身者は明治政府で優遇はされたが、旧幕府方にも門戸は開かれていた。旧幕臣の榎本武揚のように、最後まで新政府軍に立ち向かったにもかかわらず、能力を認められ大臣を歴任するような人たちもいたくらいである。

このように、鹿児島県の歴史・文化の研究が西郷・大久保らに関することに偏っていた時代があったこと、そして誤解されがちな歴史・文化が育まれていたこと、こうしたことが重なって、鹿児島の人たちに正しい歴史・文化がうまく伝わらず、残された近代化遺産などを活用しようとする動きも広まらなかったであろう。

鹿児島は非常に独特で雄大な歴史・文化を育んでいる。このため誤解されがちであるが、正しい歴史・文化が広く周知されるようになれば、鹿児島はすごく個性的で、輝き活気あふれる場所になると思っている。

5. 鹿児島視線での調査・研究、そして情報発信を

文禄5年（1596）、京都の著名な儒学者・藤原惺窩が、大隅半島にある内之浦（現肝付町）を訪れている。彼はそこで驚くべき光景を目にし、京都では想像もできなかった体験をしている。銅鑼や鉄砲を打ち鳴らし入港する中国船を目撃したり、「葡萄勝酒（ワインか）」を口にしたりしているのである。

このように同時代の一流の文化人ですら、京都では想像もできないような歴史・文化が鹿児島では育まれていたのである。それから数百年も

なぜ、歴史・文化を学ぶのか

経った研究者たちであればなおさら、東京・京都目線で鹿児島の歴史・文化を研究すれば、どうしても誤解されたものになりがちである。

鹿児島の歴史・文化を正しく理解するためには、鹿児島目線での調査・研究、そして情報発信が必要だと思っている。県内の大学・短期大学などでもその必要性が広く認識されるようになってきた。今年度は鹿児島大学法文学部に「『鹿児島の近現代』教育研究センター」が開設された。私も学外委員としてかかわっている。今後、こうした動きがますます活発になることを願っている。

なお、私はここ10年間ほど、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団の方々、小樽や岩見沢・赤平・室蘭などの方々と北海道と鹿児島の関係について研究し、情報発信していた。小樽の街づくりについては小樽運河の保存・活用運動に長年携われた小川原格氏（故人）に、小樽の石蔵については駒木定正氏に、小樽の古写真については、北海道開拓の村の中島宏一館長にいろいろご教示いただいた。ここに御礼申し上げる。

また、本エッセイの執筆を打診された直後、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団の吉岡宏高理事長が急逝されたという報に接した。吉岡理事長には北海道・鹿児島だけでなく、ドイツや石見銀山などの視察などを一緒にさせていただいていた。吉岡理事長に本エッセイを捧げたい。

（尚古集成館館長）

